

き ど あい らく 起 努 逢 楽

『起業する努力、出逢いがあって楽になる』

障害者グループホーム等支援ワーカーは新規開設のお手伝い
をします！また開設後の応援もしています！



県内でも多くのグループホーム（以下GH）が集中している松戸圏域。この圏域でGH等支援ワーカーという大役を仰せつかり、はや1年が経過しました。この1年で強く感じたことは、GHは「地域福祉の最前線」であるという事です。圏域の様々な支援機関と共に地域の福祉課題を考え、足りない支援を補える制度こそがGH等支援事業なのではないかと思ひ至りました。

私がワーカーとして意識している事は、大きな視野で地域課題を捉えながら、地域に不足している福祉資源の創出のために、GHに適切な情報提供をしながら、その他の福祉事業者や他のGHと適切な連携を取るように、つなぎ目の役割を果たす事だと思っております。

実例を挙げると、社会福祉法人の通所施設が利用者の為に、自身の法人でGHを設置していくにも、予算も人員も限界があるので、営利法人に通所施設の近隣にGHを設立してもらい入居者を融通する。社会福祉法人は日中支援の中で利用者の環境調整や支援方法を熟知しているので、営利法人のスタッフに実際に日中支援施設で、その方を受け入れる為の支援方法を一定期間学んでもらってから、入居の受け入れを行ってもらう。この事で、利用者が安定した生活環境とGH側の支援準備が整い、利用者にストレスのかからない生活が実現できるようになります。そういった提案をしていくのが、GH等支援ワーカーの仕事だと考えています。

その他にも、医療観察法対応者や触法障害者、高齢障害者、身体的ケアが必要な障害者、若者などが支援を受けながら入居できる住環境が少ないのであれば、営利法人に対して、そのような対象者を受け入れていく為に、どのような知識と研修が必要なのかを情報提供や研修を行い、実際に受け入れを行っているGHに同行して知識を学んでもらったり、実習形式で研修をお願いしたりしています。

目の前のケース対応に追われる事も多いのですが、千葉県独自の事業であるGH等支援ワーカーは、福祉事業を「横で繋いでいける」、とても貴重な存在だと思っております。千葉県が誇りに思える事業になっていくように、事業課題とも向き合いつつ、今後とも走り続けていきたいと思っております。

松戸圏域障害者グループホーム等支援ワーカー 小林 義典

松戸圏域概況（令和3年3月31日現在）

事業所数：56事業所 定員数：864名 ホーム数：178住居

◆編集後記

今まで体験したことがない、テレビの中の世界だと思っていたようなことが遠い国で、でも同じ地球の上で起きています。

命の重さはみな一緒のはずなのに、どうして人は争いをやめられないのだろう・・・

みんながもう少しづつ優しい世界が早く訪れますように・・・。



発行者 千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会

事務局 香取圏域障害者グループホーム等支援ワーカー
香取市高萩1100-2

(社会福祉法人ロザリオの聖母会 香取障害者支援センター内)

編集担当

長生・夷隅圏域障害者グループホーム等支援ワーカー 金沢千絵

千葉県障害者グループホーム等支援事業連絡協議会 広報紙

ちば発

第44号

暮らしを拓く



親として安心するために

市川手をつなぐ親の会 会長 田上昌宏



私には52歳になる知的障害の息子がいます。生活介護事業所に通いながら自宅で過ごしていますが、私も妻も元気なうちは自宅で面倒をみようと思っております。親として忍びないのですが、親亡き後、少しでも良い環境のところにいてくれればいいかなと思わざるをえず、以前は入所施設に入るのが当然だと思っておりました。

入所施設から地域移行という考え方に変わった時、親としては地域で暮らし、一般の人たちとの交流が芽生えるような家庭的な雰囲気のグループホームを理想として描きました。しかし現実とは違います。「家庭的な雰囲気」となると4~5人のグループホームになりますが、市川市には5LDK、6LDKという物件が少なく、必要なグループホーム数を確保するには新築しなければならない現実があります。また今の報酬体系では、知的障害の人、特に重い障害の人に365日、必要な支援をするための人材確保が難しい現実があります。理想を求めるには、国の予算に地域性が反映されること、そして「箱」だけではなく「人」への予算組みが必要だと感じています。

平成15年、措置制度から契約制度に変わり、営利法人によるグループホーム事業への新規参入が増えました。グループホームが増えることは歓迎しますが、必要な支援をするためには、それなりの人材確保が求められ、それなりの費用もかかります。決して儲かる事業ではありません。入居してもすぐに退去させられたり、儲からなければ事業撤退することもあります。我が子の行く末を心配する親としては、グループホームと併せて「何があっても必ず受け入れてくれるところの保障」、措置制度のような「国による保障」があって初めて安心して旅立つことができると思っています。

障害者グループホーム等支援ワーカー（GHW）に望むこと

千葉県独自の障害者グループホーム等支援事業は、とてもありがたい制度です。できれば国の制度になって欲しいと思います。入所施設ができない今、知的障害者の親としてはグループホームに頼るしかありません。その中であってGHWは充分にその役割を果たしていると思います。今以上のことをGHWに望むことは大変申し訳ないのですが、グループホームが儲かると思って新規参入する事業者が増えている今、できれば、そのような便乗業者の排除と共に、理想である家庭的な雰囲気のグループホームを運営できる方法、そして行き場が見つからない強度行動障害の人が、どうしても大変な時、例えば16人研修修了者が手伝えるような仕組みも考えて欲しいと思います。

障害者グループホーム等支援事業が始まった頃と比べグループホーム数は増えています。GHWの業務も増え、業務内容も変わりはじめています。今の業務の質を保つために、そろそろGHWの人数を増やす必要があると思います。

第47回千葉県障害者グループホーム講座

入居者インタビューから見たグループホームへのニーズと支援のあり方報告

毎年、南総地域を中心に障害者グループホーム講座を開催しております。今回も昨年同様 YouTube を活用して3月7日(月)～3月21日(月)まで、動画配信の形式で開催しました。第47回南総講座に申し込まれた人数は173名で、動画再生回数は284回でした。

障害者グループホームにはどんな人達が住んでいるのだろう?何をして過ごしているのだろう?と興味を持っている家族や職員そして支援側の関係者に広く知ってもらう為に、グループホーム入居者6名のインタビューを第1部で行いました。グループホームから就労に通っている方や身体に障害を持つ専用車椅子で過ごす方等グループホームに住んで1年から5年経っている方々です。インタビューを引き受けていただいた入居者の皆様からは、「グループホームが我が家みたいだ」「将来は結婚し自立したい」「グループホームに住んでいる他の人とは話す事が少ない」「話せる職員が辞めてしまうのが残念」など現在の様子そして今後の夢などを語ってくれました。

6名の方々の映像を参考に「入居者インタビューから見たグループホームへのニーズと支援のあり方」と題して第2部はシンポジウムを実施しました。参加者は、相談支援専門員の鈴木泰規さん、ご家族の松島和子さんとそれにグループホームのサービス管理責任者の伊藤孝浩さんと立場が異なる3名の方々、進行役は、富津市基幹相談の南雲いずみさんです。動画の中で語られた話を基本に、生活の場であるグループホームで落ち着いて暮らせる事の大事さや食事が如何に大事か等の話し合いが出来ました。

記入していただいたアンケートの感想には、「個々に寄り添っていく大切さや、自立できている部分の継続支援が大事とあらためて感じた」「自分が勤めているグループホームとの違いや工夫している点が大変参考になった」「グループホームの生活を詳しく知ることができました」等の内容が寄せられました。

グループホームへのニーズは様々です。入居者に対する支援にも課題がたくさんありますが、安心できる場所だったら皆さんから笑顔が出ます。笑顔で暮らせる場所がグループホームでありたいとの願いを込めて講座を締めくくりました。



左から、富津市基幹相談支援センター南雲いずみ氏、君津市障害者基幹相談支援センター鈴木泰規氏、グループホームさざんかサービス管理責任者伊藤孝浩氏、障害当事者ご家族松島和子氏

今年度のグループホーム等関連イベント

8月	グループホーム新規開設セミナー(動画配信)
9月	第48回グループホーム講座開催(予定)
12月	第49回グループホーム講座開催(予定)
2月	第14回グループホーム大会(予定)
3月	第50回グループホーム講座開催(予定)

みてみて！ マイホーム！



愛情たっぷり手作りごはん！ “空色” (茂原市)

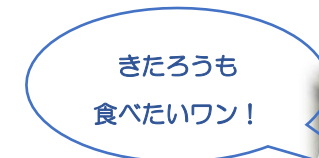
千葉県の真ん中辺りにある茂原市に「空色」は昨年8月に開設した障害者グループホームです。最寄り駅JR「新茂原」から徒歩15分の住宅街にある1軒屋タイプ6名定員の女性専用で、知的・精神の方々が入居されています。

管理者である久我厚志氏は飲食店を経営されているので、安く新鮮なお魚が入手出来る事からグループホームの食事にお刺身定食が出来る事が自慢のグループホームです。

食事に関しては、奥様の幸子氏もお料理が得意なので、利用者の為に3日に1度は買い出しに行き、世話人と共に手作りご飯を朝・昼(希望者)・夕と提供しています。出汁を鰹と昆布で取る所からこだわりがあり、塩麴も多用しながら健康第一の食事作りをする事を心掛けています。そして、寒い時期には鍋物である豚しゃぶやダッカルビ、そして季節の天ぷら等入居者が知人やテレビから仕入れた情報でリクエストがあると応えて作るそうです。コロナ禍でも行っていた毎月のイベントでは、女性が好きなケーキやクッキー作りそしてピザパーティーも皆で作って楽しんでいると。



一番大事な事は食事を通して、入居している皆さんと繋がる事です。管理者の久我氏はおっしゃいます。障害を抱える方々を支援する仕事は初めてですが、同じ人間としての目線を忘れずに、どこまでの支援が必要なのか?病気の理解など学ぶ事は沢山あります。又本人の性格も相まって現れる言動に振り回され悩み続けていますが、入居者と向き合う事はとても楽しいし遣り甲斐があります。これからも、愛情たっぷりの食事を提供していきたいと優しい眼差しで語って下さいました。



[利用料金]	
家賃	16,000円
食費	朝350円 昼200円 夕500円
水道光熱費	15,000円(季節により異なる)
日用品	3,000円